

# 瑠璃色金魚と音色の水槽

沖縄の苦い野菜

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは光を失った彼と、過去に囚われた彼女、そして今を謳歌する少女。そんな三人の物語。

目次

転がる音色	1
隣の先客	12
悲愴	19
こぼれる罪	25
小さなキミのため	34
偽りの音色	40
招待状	48

## 転がる音色

街を彩る音は様々だ。歩いているだけで、所々から音色が溢れ出る。それを雑音という人も居れば、彼のように鼻歌まじりに楽しむ人間も居る。そもそも、音に色が見えるかなどと聞かれれば、大抵の人間は見えないと答えるだろうが。

彼は左手に持つ白杖でテンポよく地面を叩きながら、人の波に乗っていた。するり、ぬらりと、針の穴でも縫うかのように雑踏を掻い潜り、口では誰もが聞きなれない独特だが楽しそうなメロディを紡ぎ出す。そんな様子とは裏腹に。

(東京つて、全体的に茶色いなあ。ウィーンには、ほとんどなかった色だ)

などと、掴みどころもなければ、何とも楽しいとは思えないことを考えていた。

(今すれ違った人は、足から焦げ茶色。溜息は藍色。あつ、後ろには黄色、身体全体から。聞いている曲は、あの子のだね。草原と青空、駆け抜ける清涼の風。社長、また弾かせてくれないかなあ……)

別に、彼には後ろに目が付いているわけではない。ならばどうして周りの状況が分かるかといえ、その類稀なる耳にあった。それはどんな音でも拾ってきて、彼に世界の彩りを教えてくれるのだ。

(僕の杖の音は黄緑。ちよつと弾みすぎかな。調子に乗り過ぎて、ウザがられたみたい)

すれ違いざまに赤色の微振動を感じて、真面目にやろうか、と彼はリズムカルな叩き方から一変。規則正しい、角の立たない無彩色の音を奏でる。タンタン、タンタン、と。波紋するのは無彩色だとしても、その震え方は違う。波の高さが、今自分がどこにいるかを教えてくれる。鉄を叩けば高く細かい波が。コンクリートはちよつと高くて暢気な波が。ゴムだと、音が潰れるか低く大らかに波が立つ。今は、ちよつと高くて暢気な波が立っている。

小鳥のさえずりのような機械音声と、雑踏の中心。横には細かく重

低音で震えるエンジン音。まだ横断歩道の中心にいた彼は、音に細心の注意を払いながら、白杖で前方を確認して、さっさと信号を渡り切る。

「へい〇〇。765プロライブ劇場まで案内よろしく」

渡り切った後も点字ブロックの上を真っ直ぐ歩きながら、いつの間にか取り出した携帯、そのアプリを慣れた様子で使い始める。女性の機械音声が「少々お待ちくださいませ」と返事をしてから十数秒。

『およそ、二十メートル先で右折してください。その次、およそ五十メートル先を左です』

「はい」

間延びした暢気な返事をひとつ。再び、地面を叩く白杖がリズムを刻む。それはさながら、鍵盤の上に指を走らせるように、右、中央、左、中央、右、といった風に。さて、メロデイへと繋げようとしたところで、ふと先ほどウザがられたことを思い出した。これは迷惑か、と無機質で最低限の叩き方へと手法を変えた。角の立たない、無彩色だ。

そろそろかな、とペースを気持ち程度に落とす。そうして数秒後。『その角で右折してください。その次、およそ五十メートル先を左です』

「ゲナウ！」

思わず口から出たのはドイツ語だった。意味は正解、当たり。日本人や欧米人であれば「ビンゴ」とでも言っていただろう。

通行人は、聞きなれない言葉にギョツとして彼を一度見るが。彼自身はそんなことに気付いた様子もなく、「警告ブロック」の上に足を置くなり、緩やかに右折する。

ちょうど、そのときだった。

彼の身体が、何かとぶつかかった。遠慮もなく、お互いに突っ込んでしまった。思いがけない出来事に「わっ」と声が出た。対面からは「きゃっ」と、箏(そう)のきつめに張った手前二番目の弦(これを為「い」という)を弾いたような、短い悲鳴がひとつ。衝撃はそれほど強くはなかったが、不意の衝撃に彼は尻もちをついてしまった。その際に、カランと手から白杖が離れてしまう。ついでに、携帯もどこか彼

方へと。

「あつ、ご、ごめんなさい！　だ、大丈夫ですか!？」

血相を変えた、といったような言葉がピツタリなほど、正面から聞こえてくる声は焦っていた。どうしよう、何をすれば、などと混乱していることが丸わかりだ。ぶつかられた側だというのに、彼は思わず苦笑して、声のした方に顔を向けた。

「大丈夫、大丈夫。出会い頭……とは違うけど、曲がったところにちやうど、だったからね」

そんな会話をしながら、彼の左手は忙しく地面をまさぐっていた。本来ならそれだけで見つかる筈なのに、今はどうしてかどこにも手触りがない。そんな非常事態に、あれ、と彼の口から間抜けな声が出る。

「あの、立てますか？　よろしければ手を」

「ああ、うん。お願いできるかな」

多分、対面の誰かに差し伸べられた彼の手は、柔らかくも芯の強さを感じさせる手に固く掴まれる。繋がれた手は彼を前面へと、ゆつくりと引つ張り上げ、彼もそれに同調するように体を起こして立ち上がる。

「あの、本当にお怪我とかは……?」

「大丈夫。手も捻ってないし、お尻もちよつと打っただけだからね」

おかげで真つ二つだよ、などとジョークは言わない。気の知れた仲であれば「H A H A H A」と笑いながら軽口を叩けるものだが、生憎と相手は初対面だ。足りない言葉に口惜しさ。ほんの少しの寂しさを胸に仕舞い込み。ああそれと、と彼は目の前の誰かに聞く。

「僕の杖と、携帯電話、何処に落ちてるかわからない?」

「あつ……す、すぐ拾ってきます!」

息を呑むような、喉が縮んで鋭く息が漏れる音がひとつ。今度は使命感に駆られる様に、その誰かは弾かれる様に飛び出した。さながら、その足音は死地に特攻する兵隊の役……舞台では、そんなところか。空気を拾うように、振り払うように靡いたのは、相手の髪の毛だろうか。だとしたら、相当の長さだ。腰より少し上くらいだろう。

とりとめのないことを考えているうちに、相手は彼の前に忠犬のように走り戻り「お待たせしましたっ」と声を上ずらせる。

「こつちが、杖です。……左手、でしたよね？」

「うん。ありがとう」

渡された白杖の感触を確かめながら、やっぱりこれがないとなあ、と相棒の帰還を祝福した。白杖とは、長年飼っていたペットのように。あるいは、何十年と使ってきた愛用の楽器のように。手放すと不安で、手元にあると安心するものだった。

「あの、それで、その……」

歯切れの悪い声。色で表すなら、紺色といったところだろうか。細かく震えて、断続的で、いびつな形をしている。それは隠し事、後ろめたさ、暗い影を伴ったときのものであると彼は知っている。しかし、初対面の相手がどうして、と思っていると。

「ごめんなさいっ！ スマホの画面、割れてしまっていて……」

そんな告白に、彼はポカンと大口を開けて硬直した。告白の内容をもう一度、反芻した。それを考え直すと、思わずおかしくなって、口から鮮やかな黄色の音色が飛び出した。

「へっ!？」

驚いたような、啞然としたような声に構うことなく。彼はその口から声を上げ続けた。目尻に涙が浮かぶ自分を想像するほど笑い続けた。そうしてひとしきり声を上げると、腹を抱えたまま、黄色く上擦った音色でひとつ。

「いやっ、ごめん、ね。だって、おかしくて。キミって、すっごく真面目だとか、馬鹿正直だとか、言われない？」

「なっ——」

失礼千万な評価に、相手はしばらく絶句した後。強い赤色の震えが聞こえてくるが、それもすぐになりを潜めた。そのことがまたおかしくて、彼は鈴を鳴らしたように笑い声を上げた。

「いや、ごめんね。侮辱とかじゃなくて。だって、僕に画面が割れたって報告。しなければバレないのに」

「……それでも、自分が悪いことをしたのなら。まして、そんなつけ込

むような真似なんて！」

冷静を装っていても、実は感情的で、真つ直ぐ。きつと中学生くらいだろうとあたりをつけた彼は、正直者に向けてはにかみながら「いいよいいよ」と手を振った。

「それに、僕は画面を見ないからね。割れたって、機能に支障がなければ変わらないよ。強いて言うなら、手触りくらいかな」

おどけた様子で、自分の身なりを晒すように両手を広げて言い切った。大らかで、気さくで、垣根を感じさせない距離感で。彼はそこに立っている。

灰色の細かな波紋が伝わってくる。困惑している様だ。日本人の感性や今までの行動から考慮して正直者の気持ちや代弁するならば、どうしてそんなに気を遣ってくれるのかわからない、といったところだろうか。それならば、逆に彼はこう言おう。

「持たざる者でも、気遣いをする心まで奪われた覚えはないよ」「っ！」

また、驚いたように息を呑む音がした。当たりのようだとほくそ笑み、彼は「それに」と続けて自身の耳に手を当てて言った。

「僕にはギフトテッドがある。等価交換さ」

人間とはよくできたもので、どこかに欠損が生じた場合、生きるためにどこかが鋭利に発達する。所謂、環境適応能力ともいうべき力が、彼の身にも宿っていた。そうして、ギフトテッドがもたらされた。もともと才能があつて、それが開花しただけに過ぎないかも知れないが、どちらにしても等価交換だと彼はそう思っている。

「だからまあ、過剰な気遣いは不要ってね」

彼がそれだけ言ってもまだ、目の前の正直者は納得していない様子だった。細かな灰色の波紋……困惑と、少し混じった青は不満か、納得できないという感情か。ここで強引に話題を切り上げて立ち去つても、心のしこりは残ったままになりかねない。それがわかる彼は、見過ごすというものにも後味が悪く思い。

妥協案を思いつき、苦笑しながらそれを提示する。

「じゃあ、道案内してくれないかな？ 765プロライブ劇場って、わ



かる？」

「っ！」

波紋が、途端に色を変えて大きく波打った。灰色と青のそれは、途端に眩しいばかりの黄金に輝いた。これほどの喜色への転換は、滅多に見られるものでもない。どうしようもなく正直で、義理堅い人なのだ、彼は浴びるように相手の人間性を感じ入った。

「はい！ それなら絶対に！ ご案内しますねっ」

「あ、嬉しいのはわかるけど、ゆっくりね？ 僕、足元注意とかできないから」

そう言いながら、彼は手を繋がれたまま、その誘導に従って歩きはじめる。本当なら肘の上を掴むというのが正しい誘導方法なのだが、相手の喜色に水を差すのもどうかと思い、彼がそれを指摘することはなかった。

手を引かれながら、ふと彼は握られている手に意識を向けた。

「キミ、もしかしてピアノやってる？」

「え……はい、習っていますけど、どうして？」

グレーと青が混ざったような色が波紋となつて、相手の手から伝わってきた。彼はその反応を微笑ましく思いながら。

「僕もピアノをやってるからね。手を触っただけで、ちよつとわかるんだ」

これも些細な能力かな、などと冗談めかしたように苦笑した。相手は少し驚いた様子で「そうなんですか」と言葉を返して、その歩みを止めた。足元の「警告ブロック」と車の走る音から察するに、信号待ちのようだ。

「ピアノはどれくらい、されているのですか？」

「11歳の時からだから……6年かな。まだまだペーパーでね。ウィーンに行った時なんて、技術のところで大目玉くらったよ」

「ウィーン!?! え……今、十七歳ってことは……!」

驚きと動揺が、声の高さと震えから伝わってきた。相手は「もしかして」と何か確信を得たように呟いて。

「……後藤久遠(ごとう くおん)さん、ですか？ ウィーンの麒麟児

と呼ばれている」

声を潜めて、そんなことを聞いてきた。彼……久遠はその問いにない目を見開く思いで驚いた。息を呑み、「えっと」と少し言葉を詰まらせて。しばらくの沈黙のあと、困ったように苦笑を浮かべた。

「驚いたなあ……日本で僕って有名なの？」

というか麒麟児って、と久遠は少々気恥ずかしい思いだった。ウィーンに居た頃は、麒麟児よりも「問題児」としての呼び名が強く、どうにも賛美というものには慣れなかった。

「ピアノを少し齧っている人なら、誰だって知っています！ 聞いたのはCDの音源でしたけど、平均律クラヴィーアなんて、心が温まるというか、包み込まれる優しさがあったといえますか……その！」

緋色の音色が熱を以て久遠の耳に届いてくる。何かを必死に伝えようと、懸命に言葉を探して、紡いで、頑張っている様子が彼にとつてはどこか微笑ましく思えた。同時に、それだけ自分の音楽を肯定してもらえることが、純粹に嬉しくなった。

「ありがとう。そんなに褒めてもらえて嬉しいよ。ウィーンだと、よく問題児扱いされていたからね。こんな基本もできないのか！ つて、師匠に何度も怒られて……あとには怒るのもやめて、呆れられていたからね」

手はほとんど動かさず、肩だけ竦めておどけてみせる。褒められ慣れていないせいかわ、どうにも矛先を逸らしたくて、そんな照れ隠しが自然と出てしまった。

「えっと、具体的には……？」

「その前に、青になったね。信号、渡ろっか」

「あつ、すみません……」

指摘してから、改めて誘導を始めてもらう。それが軌道に乗り始めてから、彼は先ほど聞かれたことについて、指折りに怒られたエピソードを語り始める。これが面白いことに、語れば語るほど、開いた口が塞がらない、といった様子への反応を相手がみせるのだ。ついつい、おかしくなって彼の会話にも熱が入る。

そうして雑談をしているうちに、相手の足がはたと止まる。「あつ」

と名残惜しそうな声が藍色の波紋となって響き渡る。今までの様子も含めて、まるで子犬のような様相の相手に、彼の頬がますます緩んでいく。

「あの、765プロライブ劇場に、どのようなご用事で？」

不意に、そんな質問が投げかけられる。咄嗟に思いついた質問なのだろうか。久遠はその質問に、何の気なしに答える。

「会いたい人が居るんだ。紬ちゃん……白石紬、って子なんだけど」

その瞬間、ふと空気が緊張の糸によって張り詰めたような気がした。え、どうしたんだろう、と首を傾げて困惑していると。またも相手から質問が。

「紬さんとは、どのような関係なのですか？」

それを聞いて久遠は「ああなるほど」と心の中でひとり納得した。いきなりアイドルに会いたいという男。いくら名が知れているとはいえども、警戒されるのも無理はない。まして、相手は真面目な性格だ。形式上だけでも、そういった質問は済ませておきたいのだろう。「幼馴染でね。ウィーンに渡ってから、ずっと連絡してなかったから。心配してるかな、って」

別れ際のこととは今も覚えていた。空よりも、海よりも、深海よりも濃い青色の波紋。夏祭りの中、ビニールプールから引き上げられそうな金魚がみせる抵抗のように、激しく波打つ音色。掴まれた手のぬくもりは、今なお思い出せる、燃えるような青色の熱が宿っていた。

——あのどうしようもなく濃い、青色の炎が、今は鎮火していることを願う。

もしも、まだ彼女の奥で燃え続けるとするならば。

(僕は何が何でも、伝えないといけない)

決意を固めて、腕と指の調子を悟られない程度に確認する。大丈夫、何も心配はない、と自分の心に言い聞かせる。

「そうでしたか。それでは、765プロライブ劇場の中をご案内しますね」

そんな久遠の様子に気付いた様子もなく、相手は彼の手を優しく引いて先導を始める。そんな相手の反応に、やっぱり、と彼は口角を上

げる。

765プロ所属。真面目で、声は平静を装いつつ、中身は情熱的。サファイアから透かして見た水平線の煌めきのように美しく、漣のように思わぬ力を見せる声。大人びたわけではなく、いつも等身大の輝きを放っている。

彼女の歌を知っている。社長からは「君が気にすることではない！底辺765プロのリサーチなど不要だ！君の耳を使うまでもない！」などと強く言われたが。敵情視察を言い訳に幼馴染の歌を聞きたくて、結局、リサーチは全て済ませてしまっていた。

「ここから先は階段があるので。注意してください」  
「ああ、ありがとう。助かるよ」

一步、一步、ゆっくりと段を踏みしめる。少し硬質で、音の反響が高らかな階段はコンクリートのものではない。表面と、少し奥で波打つ音質が異なっていることを考慮すると、おそらくタイル張りになっているのだろう。入り口から階段までは、足音を沈みこませるようなカーペットが敷かれていた。きつと、華やかな内装になっているのだろうと予想できた。

階段を上り切り、二階へ。そうして少し進むと、賑やかな音があちらこちらで跳ねまわる。中には物を全力投球する音や、カメラのシャッター音、そして油の跳ねるような音まで。

「……ひとついいかな」  
「はい？」

歩調を緩めに歩きながら、久遠は何よりも疑問に思ったことを、素直に口にする。

「ここって、アイドルの集まる場所だね？」

「え、ええ……えつと、それがどうかしましたか？」

「いや、物を全力投球……まるで野球でもやっているような音がしたからね。カメラのシャッター音とか、調理の音はわかるんだけど……あれって、何かのレッスン？」

握っている手の脈拍が、少しだけ上がったような気がした。こころなしか、彼女の手が汗ばんできている。まるで何かを堪えているかの

ように、細かな震えが空気から伝わってきた。

「……多分、何かの間違いかと」

——パン！ と、棒状のもので何かを殴り飛ばしたかのような乾いた音が木霊する。ほぼ同時に、何かが壁に衝突したような音もセットで。彼女が赤紫の声音を発した直後であった。

「えっと、今確かに」

「気のせいです」

「いや、でも——」

「気のせいです」

「……安全地帯に、案内してね？」

「当然です！」

押し切られた。有無を言わせぬ圧力が、無彩色のくせして激しい重圧をもった雰囲気、彼を頷かせてしまった。危険な場所などない、と言い返さないあたり、やはり彼女は正直者だと、彼は苦笑した。

「控室に入りますね」

そう断りを入れてから、彼女が扉を開けたところで。

「あつ、最上さん。お帰りになられていたのですね。随分と、お早いようですが。何か忘れ物でも……？」

落ち着き払っていて、角の立たない品格を意識した、鮮やかな紫色の声。水滴が水面に落ちるように、静かに波紋となつて耳を打つ。忘れる筈がなかった。その声音を。その主を。

「いえ、そういうわけでは。実は——」

誘導してくれていた彼女、最上静香が説明をしようとしたところで。久遠は「ちよつといいかな」と静香の横からその姿を現した。

「久しぶり、紬ちゃん」

「——っ！」

息を呑む音が聞こえてきた。その驚きようは、目を見開いて「信じられない」といった風に視線を向けているのだろうと。簡単に予想できるほど、グレーと紺色の音色が重く、しっかりと伝わってきた。

「……なんで、久遠くん、が……ここに？」

歯切れの悪い言葉だけでも、如何に動揺しているのかが伝わってきた。

た。どうやら驚かせすぎてしまったようだ、そう思いつつも彼は悪戯に成功した小僧のような笑みを浮かべて。

「三日前に帰国してね。サプライズだよ」

爽やかに、何でもない様子で、そう言っただけのけろのであった。

## 隣の先客

765プロライブ劇場の控室。その中では、得も言われぬ緊張感が走っていた。感動の再会を二人が喜ぶなどと、そんな展開はなかった。久遠のサプライズは、紬をただただ混乱させるばかりだった。その様子を見て話が進まないと思わず察した静香が間に入って、三人は今、控室の椅子に座っている。

「えっと、どこから話したらいいのかな」  
「……」

久遠の困ったような声に、紬は無言を貫いた。彼女は実のところ、顎に手を当ててどう話を切り出そうか、と必死に考えているのだが。彼にとっては、与り知らぬ情報である。

「まずは、そうですね。音楽の都で開催されたコンクールで、優勝したと。風の便りで聞きました。おめでとうございます」

落ち着いた口調、整った声音が彼の耳を打つ。昔みたいにはいかないか、と久遠はほんの少し寂しい気持ちを抱きながら。しかし、その態度や行動は昔のままだと懐かしい思いも抱きながら。祝福の言葉に頷いた。

「ありがとう。でも、よく知っていたね。ウィーンのことなんて、日本には早々広まらないものだと思うけど」

「……文のひとつも送ってくれない薄情者と、一緒にしないでください」

先ほどまでの穏やかな声とは一変。とげを含んだ、攻撃的な声音が彼の耳を刺激する。久遠には、対面に座る彼女から、赤色と……それに隠れるように赤紫の波紋が滲み出ているように映っていた。ああ、怒っているんだなあ、と申し訳なさがひとつ。照れ隠しが混ざったそれに、微笑まじさがひとつ。久遠の知っている彼女が、目の前で見え隠れを繰り返していた。

「それは、ごめんね。うちの社長……いや、業界風に言うならスポンサーかな？ その人は、ちよつと厳しい人でね。孤高を尊ぶというか、独立主義というか。今回ここに来たのも、お忍びなんだ。ウィー

ンでの一人行動は、身の危険が、ね。ヘルパーの人は、社長の意見を優先する人だったから。手紙も止められてた」

「……そちらの事情は、わかりました。ですが、どうしてうちのところに？」

「心配して、苦労かけてるかなって。だから、仕事が終わってから真っ先に飛んで来た」

真っ先に？ と紬はその言葉に反応して、一瞬だけ体も震えていた。しかしそれもすぐに露となって消えると、途端にあからさまな溜息を吐いた。

「あなたは……バカなのですか？」

「えっ」

まさかそんな反応が返って来るとは思わず、呆けた声が久遠の口から漏れ出る。そんなことをお構いなしに、彼女は言葉が続けた。

「遠方の地より戻ったのなら、まずはご両親に挨拶をするのが常識です。海外で、文のひとつも出さず、音信不通の我が息子を、大変心配されていることはすぐにわかるものです。それを、あなたという人は……」

正論だった。ドが付くほどの正論を前に、久遠は肩身狭く縮こまるほかなかった。しゅんと落ち込み、話を聞く様は叱られた子犬を連想させるほど愛らしかったとか。

「確かに、うちも心配しました。ですが、それ以上に心配なさっているのは、あなたのご両親の筈です。なので、この話が終わったらすぐに、ご両親にご挨拶に行ってください。わかりましたか？」

「……はい」

ここで彼は、気が付いたとしても「一人称と口調が迷子」などと絶対に指摘しない。そんなことを指摘すれば「ふざけているのですか!?!」と怒られることは目に見えていた。わざわざ自分から、藪をつついて蛇を出そうなどとは思わなかった。

「……あの、紬さん。さっきから、一人称と口調が……その、混ぜっつていますよ」

今まで置物のように座っておとなしくしていた静香が、横合いから



藪をつついてしまった。空気はガラスに亀裂が入るような大きな音を立てて凍りつき、紬も久遠も固まった。久遠は「やつちやつたよこの子」と両手を挙げる様な思いで、おそるおそる、事の顛末を見守るため沈黙を貫く。

「顔の方も赤いようですし」

——最上静香は白石紬に追い打ちをかけた！

そんなフレーバーテキストが出てきそうな様子に、久遠は嘔き出すのを寸でのところで堪えた。まさかわざとやっているのか、と勘繰って意識を集中させるが。静香から伝わってくるのは、一定間隔で漏れ出る水色の波紋だ。ああ、これは本気で心配している様子だ、と久遠にはわかってしまった。だからこそ、幼馴染を本気で不憫に思った。「何か、飲み物を持ってきます。近頃、熱中症が話題になっていますから。気を付けてくださいね」

ええ、この人マジで言ってるの、と久遠は背中に冷や汗をかきはじめ。場を乱すだけ乱して、静香はこの場を一時離脱すると言っているのだ。しかし、引き留める理由も無ければ、先ほどの件を指摘するのは紬への更なる追い打ちになるのは明白。黙って見送るほかに、久遠に出来ることはなかった。

静香は、控室の扉から出て行った。扉が閉まる音がしてしばらくは、部屋の中に重苦しい沈黙が流れる。両肩にのしかかるような鉛色の空気に、さて話をどう切り出したものか、と働かない頭で考えるふりをして現実逃避に繰り出した。

「……なんなん、もう」

蚊の鳴くような弱々しい声が、控室の中で虚空に消え入った。ああどうするのこれ、とか。飲み物持ってくるには遅くない？とか。久遠の頭の中はまともに働かず、気の利いた言葉を投げけることも出来ず。部屋の中は、重苦しい沈黙がなおも支配していた。

「久遠くんは」

長い沈黙の後。不意に、紬から口を開いた。助かった、と当面の危機が去ったであろう話題の提供。それに釣り針の餌目掛けて飛びつく魚のように、彼は紬の言葉を食い気味に聞き入る姿勢になった。

「なんで、うちのところに来たん？」

焼きまわしたような質問だった。だが、聞いていることが全く違うことは理解できた。久遠はその質問に、ほどよく間を開けてから答える。

「最初に、紬ちゃんに報告しなかったから。向こうでこれだけやってきたよ、つてね。……みんなの反対押し切って、行っちゃったから。

一番心配してくれた紬ちゃんには、最初に報告しようって、決めてた」  
紬は久遠のウイーン行きに、最後まで反対していた。空港で最後の最後まで、久遠がゲートを潜る時になっても反対していたのだから、その決意はまさに筋金入りといえる。その思いはきつと、彼女が久遠に対して親身になって心配していることと、強い責任感とが合わさった結果なのだろうと、彼はそう考えている。だから、帰国しての成果は一番に彼女に伝えようと、決めていた。

「……うちのこと、嫌いになってないのけ？」

「えっ、そりやまたどうして？」

「だって、うち。うちのせいなのに……久遠くんの夢、あんなに反対して……。自分勝手に、怒って、泣いて、引き留めて。みつともなくごたむいて……。それが嫌になったんやないのけ？」

ああ、そういうことか、と。久遠は紺色の波紋を広げる紬の言葉に納得する。そして、彼女の「自分を嫌いになった理由」が見当違いな方向に向いていて、それがどうにも彼女らしくて、彼は思わずその喉から黄色の音色を奏でた。

「なっ、いきなり笑って、なんなん!？」

「いや、紬ちゃんらしいなって。思い込むと的外れになって、ポンコツになるところとか」

「ポンコ——ッ！」

赤色の大津波が彼女から溢れ出たかと思えば、それも一周回って収まった。怒りのあまりショートしたのか、はたまた冷静になったのか。何はともあれ、これはチャンスだと思い、久遠は言葉を重ねる。「そんなことで紬ちゃんを嫌いになるなんて、あるわけないよ。いや、あの粘り強さとか、気迫にはちよつと気圧されたけど……それは紬

ちやんの長所だし。一度決めたら、まっすぐ貫き通すところ。……それに、僕の決断も今は理解してるんでしょ？ 自分がアイドルになるために、東京に飛び込んだから」

白石家の厳格な両親を見たことがあるからこそ、アイドルになるための説得が如何に困難を極め、それでも押し通したのかが、彼にはよくわかる。かくいう彼も、そんな両親や友人を押しつけてでも、ウィーンに旅立ったのだから。

「理解は、しとる。でも、納得はしとらんげん……」

「それでいいよ」

過去との折り合いをつけるのは並大抵ではない。特に、純粋に幼馴染という枠には収まり切らない久遠と紬の関係は。いくら久遠が樂觀的に折り合いをつけていたとしても、未だ紬の方はそれが出来ないことは、彼にもわかっていった。原因の一端を担っている久遠には、それを言及することが出来ない。少なくとも今はダメだと、彼はひとり小さく首を振った。

「この後は、どうするん？」

「ん、特に決めてないかな。ただ、抜け出しちゃったからね。そろそろ、社長が血相変えて探してるかも」

あはは、と苦笑を漏らす彼に対して、紬はほとほと呆れたといった様子で額に手を当てて首を横に振った。ついでに、大きなため息も一つ。

「昔みたいに、送ろうけ？ 久遠くん一人は、危ないげん」

呆れた様子ながらも、紬はそんな提案を持ちかけた。彼はそれに懐かしい思いを抱きながら、ひとつ頷いて。

「それじゃあ——」

お願いしようかな、と言葉にしようとした時だった。

突然、控室の扉が音を立てて開いた。久遠はそれに少し身構えて、更に足音が二人分あることに首を傾げた。静香一人だけ、というわけではないらしい。一方、紬は「あ、最上さん」と一人目の姿を視界におさめて声をかけて……二人目の来訪者を見て、息を呑んだ。

「ああ、やつぱりここに居たんですね！ もうっ、クオンさん。パ……

社長が鬼のようになって探していましたよ！ 早く事務所に戻らないと……！」

「あちゃあ……」

その声音は、清涼の風のように鮮やかに波紋する。久遠はその話を聞いて思わず天を仰ぎ、「時間切れか」と呟いた。

「ごめんね、紬ちゃん。彼女に送ってもらおうとするよ。……社長も、しびれを切らしてるみたいだし」

「どうして、詩花さんと、久遠くんが……？」

突然の乱入者。それは、961プロ所属アイドルの詩花だった。時折、この765プロライブ劇場に遊びに来る彼女は……しかし、今日は久遠を連れ戻すために来たという。一体どういうことなのか、訝しむように紬の端正な眉が動く。

「ああ、紬ちゃん。グリユース・ゴット。お話し中のところ、ごめんなさい。うちの社長が、クオンさんが居ないことに気付いちちゃって……今すぐ捜索隊を派遣しそうな勢いな」

「……詩花さんは、961プロ所属ですよ？ えっと、どうして久遠さんが……？」

紬と静香、二人が状況を把握していないような反応を見て、詩花は現状をすぐさま理解した。そして、説明しようと言葉を紡ごうとしたところで。

「実は——」

「いや、僕の口から言うよ」

今まで椅子に座っていた久遠が立ち上がり、口を挟む。彼は白杖を左手に持つてから「先導お願いできるかな？」と詩花に向けて頼むと、彼女は「任せください！」と花が咲いたように柔らかい黄色の波紋を木霊させる。

「僕はね、961プロに所属しているんだ。正確には、社長はパトロンだけ。お抱えのピアニスト、ってところかな」

961プロ。その言葉に反応して静香は小さく息を呑み、紬は目を見開いて固まり、呼吸すら忘れるありさまとなった。

「だから、ごめんね。紬ちゃんが961プロの目の前まで行くと、社長

に何か言われるかもしれないから。あの人、765の人を執拗に目の敵にしてるから……」

悲しそうに眉をひそめて、久遠は「それじゃあ、今日はこれで」と目の前に手を伸ばし、詩花は静かにその手を自分の肘の上で掴ませると、慣れた様子で誘導を始めた。

「失礼します。また、遊びに来ますね」

「僕もまた、抜け出せそうなきときは来るよ」

二人は新郎新婦のように（役が逆ではあるが）、控室から退場する。そんな二人の後ろ姿が、いやに紬の網膜に焼き付いて離れない。慣れたように、しかし様になっているその姿は、長年付き従っているパートナーのようであった。

「久遠くん……」

まるで、どこか遠くに行ってしまったような幼馴染の姿。目の前にいるというのに、彼がウィーンに居る時と変わらないほど、その距離は開いているように思えて。更には、いつも自分が居た場所には、詩花が居たことが、彼女の心を余計に抉り込むようだった。

同じ部屋に静香が居るにも関わらず、彼女はポツンと、その場にひとり取り残されたように思えて。

その悲しみを、紬は唇を噛みしめ、手を握りしめて。ひっそりと耐え忍ぶのであった。

## 悲愴

——次の詩花の公演。その伴奏を貴様に任せる。

——今や詩花もトップアイドル。その伴奏がCD音源などと、少々安っぽいとは思わんか？

——そこで貴様の出番だ。精々、詩花を引き立てる、その礎となることに全力を注ぐがいい。

——言っておくが、今日みたいに無断で出歩く暇があるなら。次の公演に向けて練習でもすることだ。

——わかったな？

先日、765プロにお忍びで遊び行った後の話だ。961プロに戻ってみれば、そこで待ち構えていたのは警備員を集めた黒井社長の姿。今まさに捜索隊を派遣しようとする場面であった。そんな中、詩花が久遠を連れ戻してきたのを見て、黒井社長はふと息を呑んだが、次の瞬間には何事もなかったかのように「通常業務に戻れ」と警備員たちに指示を出すことでその場は解散となった。

そして次に待っていたのは、当然のように社長室への呼び出しである。詩花のフォロー虚しく、一人で呼び出された久遠は黒井社長に小言をいくつかぶつけられた後、言い渡された指令が次の公演の伴奏をすることである。

やっと仕事が終わってきた、と彼は二つ返事で頷いた。対して、当然だと言わんばかりに鼻を鳴らした黒井社長は「話は終わりだ。さつさと練習でもするがいい」と彼を部屋から退出させた。

現在、そんな出来事から三日が経っている。公演まであと二週間ほどしかなく、その時点で伴奏を任命してくるものだから、久遠のスケジュールも必然的に埋まってしまった。

初日は社長室から退出した後、詩花を通してセトリを聞き、そのCD音源を全て取り寄せた。

二日目は、取り寄せたCD音源をとにかく聞き込んだ。楽譜を読め

ない彼は、その耳で音の全てを覚えて、黒井社長より与えられたマンシヨン。防音室にあるピアノで弾いて手に馴染ませる。

三日目、即ち今日は。手に馴染ませた音を転がしていた。どうやって表現するか、どうメリハリをつけるか、詩花の歌声に対して、伴奏の自分はどのように引き立てればよいのか。あれでもない、こうでもない、と鍵盤に指を走らせながら試行錯誤を繰り返す。

「というか、これ詩花さんとイメージ共有しないとダメなような……」

愚痴を呟きながら。彼は挑戦という意味も込めて、緋色と茜色の音をメロディとして爆発させた。大きく、高みを目指すように、鷹が天空を羽ばたくように。そうして弾き終えた時、手に残るのは違和感だ。これじゃない、という微妙な、何とも言えない気持ち悪さ。手をシロップにでも突っ込んだかのような感触だ。

「違う。もつと、挑発的に……」

挑発的ってどうやるんだろう、と気になるフレーズを鍵盤の上で転がした。激しく、速く、あるいは音を伸ばして、縮めて。赤と黄色の音色を混ぜてとにかく高飛車に。見下ろすように傲慢な旋律を。そのどれもが、違うような気がした。

(ピアノ曲とアイドルの曲って全然違うなあ……)

やっていることは変わらない。だが、工夫の仕方がまるで違った。例えばオーケストラであれば、指揮者との音楽性のすり合わせをすれば、後はそのオーダーに合わせるだけで事足りた。追加編纂は、また指揮者と話をすればいい。

ソロで弾くのであれば、曲への理解と技術点を煮詰めることが命題となった。こちらはある程度自由度が高く、基本的に忠実であれば音色を自由に変えられた。

では、アイドルの曲はどうかと聞かれれば。オーケストラのように全体に溶け込んで一つのハーモニーを生み出すわけではない。かといって、ソロのように独善的に音色をコロコロと変えれば、歌っている側が混乱するだろう。今回は特に、伴奏と歌い手の二人だけの舞台。その伴奏は、歌い手を高めることだけに、集中しなければならぬ。

弾き方が、まるで違った。

合わせて、音色を弄るだけではどうにもならない。むしろ問題はそんなところにあるのではなく、もっと根本的なところにあるように感じられる。見えないことが、暗闇が、久しぶりに気持ち悪く感じた。まるで泥の中でもがいているかのようだ。

歌い手の為だけに奏でる音楽。それは限りなく献身的なものではないかならないのか。盲目的に後ろについて行かなければならないのか。いや、追従し後押しを行う風のように弾くのがよいのか。

(ダメだ。やっぱり、イメージをすり合わせるために一度会わないと) 果たして、今からスケジュールの合間を縫って会うことが出来るのか。甚だ疑問ではあったが、彼はポケットの中から携帯を取り出した。起動して、パスワードを打つ時……画面の不自然な感触に、苦笑が漏れる。

ピロン、と飛び出す様な機械音が鳴り響く。ロックを解除したときの音だ。

「ハイ○○。詩花に電話をして」

ともかくまずは、行動しなければと。久遠は決意を胸に、電話を耳に当てて、鳴り響くコール音に集中するのであった。



「あ、あった。これね、久遠さんの本選の演奏記録」

同日。事務所の控室にて。最上静香はネットサーフィンをしていた。三日ほど前に久遠本人に会ってから、どうしても気になって、彼が優勝したというコンクールの演奏記録を探していたのだ。海外の動画ということで時間はかかったが。ようやく、お目当ての動画を見つけることが出来た。



タイトルは「○○コンクール本選。ベートーヴェン ピアノ ソナタ 第8番『悲愴』 後藤久遠」というもの。投稿日は半年ほど前だった。せつかく見つけたのだから視聴しなくてはと、携帯にイヤホンを挿してから、両の耳に装着する。

緊張から、深呼吸をひとつ。程良く肩の力を抜いた後、たつぷり数秒、目を閉じた。それからゆっくりと瞼を上げると、いざ、とその再生ボタンを押した。

その瞬間だった。

「っ!？」

キュツ、と心臓を鷲掴みにされたような圧迫感のある音が頭の中で爆発する。思わず身が縮こまり、身体が飛び上がり、喉の奥から鋭い息が漏れた。なんだこれは、と思っているうちに次の旋律に。まるで大雨の日の大気のように湿った音が、嫌に低く地を這うように紡がれる。夜などという美しいものではない。暗闇のように、全てを包み込もうとする重い音符が、地を這っていた。あるいは、空気中の澱みとなつて揺蕩っている。

気分が重い、心にのしかかる、苦しい。そんな思いを抱いてしまうのに、一時停止を押そうとする手は動かない。耳が離せない。目が離せない。もつと聴いていたい。正しく悪魔の囁きのような魅力が、中断というものを許してくれない。

心は落ち込む。旋律が紡がれる度に沈んでいく。まるで底なし沼のように。音の一つ一つが、真っ黒に塗装されていた。滲んだ墨汁のように曖昧な音もある。それがより正体不明への絶望を表わしているかのようで、心の底から冷え込んだ。

——それなのに、どこかで喜んでいる自分が居た。背德的だと、面白いと、嗤っている、醜い自分が心の底から楽しんでた。

耳で追ったのは、そんな音。そして目で追っていたのは、演奏者である久遠の表情だ。彼の表情は……悲痛に、歪んでいた。プロの音楽家であれば、その音を出すために表情まで変化させる人は、少なくない。

しかし、久遠のその表情は、絶望と悲しみと、痛みと苦しみ、怒り

に失意。それを思い出すかのように、臨場感をもって、歪んでいる。まさに、「悲愴」な面持ちと云わんばかりに。

そうして、耳も目も離せず視聴しているうちに。

演奏は、終わっていた。

(なによ、これ……)

音楽を聴いていたただけだというのに、動悸が激しくなり息が切れていた。気分は最悪といっても過言ではない。だが、そんな思いにさせて尚、聞き手を惹き込むだけの魔性の魅力があることは、確かだった。

——問題児。胸の奥でつかえていたその言葉がようやく、音を立てて落ちていった。これは確かに、問題児と評されるだけのことはある。気分は最悪なのに、機会があればまた聞いてみたい、という怖いもの見たさの自分が居る。

何より、芸術という観点でいえば、人の心をこれだけ動かせる音楽に。いちやもんをつけることは憚られた。むしろ、その力はどこまでも突き抜けている。ただ、それが正と負のどちらに向いているのか。その違いだけが、厄介だった。

「紬さんには、聞かせられないわね……」

というより、他の人に好んでオススメ出来る様なものではない。まるで暗闇の中でもがき苦しんでいるようなこの演奏を、誰かに聞かせようなどとは思えない。彼女はそっと、自分の中に仕舞い込もうと心に決めて。

「……私に、聞かせられないとは？」

「ひゃっ!?!」

後ろから声を掛けられて、咄嗟の事に変な声が飛び出した。慌てて振り返ってみれば、そこには件の紬が立っていた。静香は慌てて動画からホーム画面に戻した後、イヤホンを耳から外して「何でもありません」と誤魔化した。

訝しむように眉を寄せる紬は、胸に手を当てて「もしかして……」と何やら不安そうに呟いたあと。

「私は、最上さんに何か、知らないうちに失礼なことを……?」

そんな早とちりな見解に行きついた。静香は慌てて「ち、違いま

すつ」と否定してから「ええと」と視線を四方八方に泳がせ言葉を探す。だが、当然ながら空中に最適な言葉が落ちているわけも漂っているわけもなく。

「ベートーヴェンの『悲愴』が、思ったより暗くて。あまり人にはオススメできないと、そう思っただけです！」

静香の必死の弁明に、紬は息を呑んで固まった。しかし、それも一瞬のことだ。すぐに視線は下を向き、その瞳は揺れ動く。

「久遠くんの、ことですね」

「えっ」

どうして、と聞く暇もなく。

「あまり、彼の事を嫌いにならないでいただけると……嬉しいです」

そう言葉を重ねると、「失礼します」と紬は背を向けて外へと足早に去って行った。言葉を継ぐ暇も、質問を投げかける余裕さえもなかった。まさに一瞬の出来事で、瞬きをしている間に、紬は静香の目の前から消えていた。

最後に見た、真一文字にきつく結ばれた口に、胸を押さえた手、俯いた視線。

それらがどうにも、静香の頭の中に残り続ける。

不意に、ベートーヴェンの『悲愴』の出だしが耳の奥に流れ込んだような気がした。ハッと呆然とした様子から一転、意識を叩き起こされてから、ひとつ。

胸の奥で黒い霧が、渦を巻くように。

嫌な予感が、彼女の脳裏について離れなかった。

## こぼれる罪

甘味処。ウイーンでピアノを学んでいた久遠には、久しく馴染みのない場所だった。まだ日本に居た頃は、よく稽古の帰りに幼馴染の紬か、あるいは両親と行ったものだが。その記憶が余計に、彼を強くその場所へと導いたのかもしれない。

結論から言うと、久遠と詩花の打ち合わせは、東京某所にある甘味処で行われることとなった。電話口で詩花に「どこがいいですか?」と訊かれたときに、ふと出てきた答えが「甘味処」という何とも漠然とした答えだった。何処の甘味処、まで答えられれば良かったのだが。彼は東京という地理に疎かった。加えて、なかなか散策に行く機会も、調べることも難しいものだから。店舗選びの一切合切を詩花に任せていた。

そして打ち合わせ当日。詩花の決めた目的地へ、久遠はタクシーを使つて移動している。騒ぎになっては困ると思い、前日には黒井社長に対して、甘味処で詩花と打ち合わせをするとの一報を入れた。「我が961プロの会議室を使えばいい」と最初は反対されたものの、その日は公演も近いということもあり会議室はすべて埋まっていたため、そのまま許される形になった。「ふん、まあよい」と鼻を鳴らしながらの了承は実に社長らしいと、当時の久遠はひとり苦笑していた。

「到着しましたよ。お代は1860円になります」

「はい。ありがとうございます」

運転手の言葉に、久遠は財布を取り出して、お札のポケットを開く。手前から順に、野口さん、樋口さん、福沢さんが入っている。守礼門の住まう場所はない。小銭は手で触れば見分けがつくが、860円分を出そうと思えば時間がかかる。もしも小銭がその分なければ時間の浪費だ。そう思い、彼は野口さんを二枚取り出して運転手に渡した。

「あ、お釣りは結構です」

「はい。扉を開けましたが、ちよつと待ってくださいね」

運転手は断りを入れると、扉を開ける音が彼の耳に届く。それから数秒後、「手を握りますよ」と前置きをしてから、その宣言通り手を握られる。ゴツゴツとした硬い手の感触は、長年ハンドルを握ってきた証なのだろう。

「目の前に段差があるので、気を付けてくださいね。忘れ物は……ないみたいですね」

「わざわざ、ありがとうございます」

こういう場面だ。こういう時、心が柔らかく解れていき、生姜湯を飲んだ時のように内側から温かくなっていく。春の陽気を体に浴びて、花の香りを一杯に吸い込んだかのような爽快感と温かさが、身体を包み込むように広がるのだ。

「いえいえ。これくらいは。もしよろしければ、今後とも〇〇タクシーの相川をご贖員に」

茶目っ気が半分、期待が半分。しつかり者のイメージが強い硬めの話し方が少し崩れて、人間性を垣間見た。それがどうにもおかしくて、久遠は朗らかに笑みを浮かべながら、段差を一つ乗り越える。

「はい。しつかりと、覚えておきます」

ありがとうございますと、と運転手の方に向けて一礼をした。運転手の相川は「いえいえ」と謙遜をひとつ口にした後、「それでは」と手短かに別れを済ませて、運転席へと戻って行った。

停まっていたタクシーが発車した。さて、詩花は来ているのだろうか、と車道とは反対側に向いた時だった。

「先ほどの運転手さん、優しい方でしたね」

不意に、しみじみと感じ入ったように、味わい深い秋風のような声がこぼれ落ちた。詩花の声だ。彼はそれに同意するように頷いた。

「ちやつかりした人だけだね。それが人間臭くて、温かい」

「ふふっ、そうですね」

ほんの数秒、沈黙が訪れた。お互いが、陽気の名残を楽しんでいた。それを切り上げる合図となったのは、久遠が前に差し出した右手であった。左手には白杖がある。

「誘導、お願いします」

「はい。しっかりとエスコートしますね」

肘の上まで手を導いて、彼はそれに従って誘導主を掴む。ふと、エスコートって立場が逆じゃないだろうか、と彼が口にするれば、彼女はくすつと息を吹くように笑いを漏らした。そして、ちよつとしたお茶目です、と朗らかに言つてのける。歩きますね、と前置きをしてから一拍。彼女はゆっくりと歩き始めた。

「予約していた後藤です」

ただ、当然ながら店の目と鼻の先でタクシーは停まったのだから。数歩だけ進めばすぐに到着する。詩花は店員と話しているのだろうが、思わずその内容にギョツと肩が跳ねた。どうして自分の名字を使わなかったのか、と疑問に思っていると。

「はい。それでは、席にご案内いたします」

そんな店員の声の後に、歩きますね、と詩花の補足が入る。細かいように思えるが、歩きはじめのタイミングがわかるというものは、非常にありがたいものだった。そのおかげで、躓くことも焦ることもない。

案内された席に、久遠と詩花は向かい合うようにして座った。椅子の位置は分かりやすく、背もたれに手を誘導してもらうだけで何とかなった。白杖は壁に立てかけるように置いて。両者が座ると、店員はメニューを詩花の前において。

「当店のおすすめは宇治抹茶あんみつになります。寒天と抹茶ゼリー、そして白玉の上のみかんを一房、丹波大納言あずきを少々乗せております。あんみつは濃厚な宇治抹茶を用いたみつになります」

すらすらと店員から紡がれる説明に、彼は思わず喉を鳴らした。これは気に入った様子だ、と詩花は目敏く察した。

「他にも、商品の説明は必要でしょうか？」

声を向けられて、いえ、と彼は首を横に振ってから。

「それでお願います」

「私も同じものを」

「かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

店員はゆつたりと、落ち着いた足取りで席から離れていく。その足

音を拾っていた久遠は、ふう、と息を吐いて肩の力を抜いた。芳しい檜の香りと、仄かに香るあんこの匂い。大声ではなく、程良い喧騒に包まれた空間は、何とも居心地がよかった。

「気に入っていただけましたか？」

「店の雰囲気はすごく。あんみつはまだ食べてないから、何ともね」

あんみつもきつとおいしいですよ、だろうね、と店の雰囲気に浸りながら、のんびんだらりと空間そのものを楽しんでから。

「詩花さんは、ステージの上でどうしたい？」

何の前置きもなく、豹変したように声音を真剣なものに変えて、刀直入に本題へと切り込んだ。えっ、と呆気にとられたのも一瞬のこと。そうですね、と詩花は考えているのかしばらくの間を開けた。

「……みんなが楽しめて、笑顔になれる。とつてもステキなステージにしたいです！」

「楽しめて、笑顔に、か」

久遠は思わず、目を細めるように力んでしまう。その答えがあまりにも輝いていて、自分とは全く対に位置する場所にあるから。手を伸ばそうとも届かなくて、そこまでの道さえ用意されていない。でも、確かに遥か高い場所に、そんな憧れの舞台が輝かしい威光と共にある。一等星のように天に輝く舞台に、詩花は真っ直ぐ、前を向いて歩いている。地の底に落ちた彼には、その姿勢がどうしようもなく眩しかった。

「うん。わかった。僕も出来る限り、背中を押せるように頑張るよ」

そう言って、一呼吸を置いた。次はどの話題を切り出すべきか、と久遠が顎に手を置いて考えていると、失礼します、と横合いから声が掛かる。

「サービスの煎茶と、宇治抹茶あんみつをお持ちしました」

先ほどと同じ店員の声だった。二人の前にそれが置かれた時、わあ、と詩花が嬉しそうに楽しそうに声を上げた。よほど美味しそうに見えたのだろうか。

「それでは、ごゆっくりお楽しみくださいませ」

そう言って、店員は先ほどと同じように落ち着いた様子で席から離

れていった。食べようか、と彼はそう言っただけ早く、机の上に手を伸ばした。食器が置かれた時の音から、ある程度の位置は把握していた。一発とはいかなくとも、手を伸ばし、何処にあるかと探るよう動かしただけで見つかった。おそらくスプーンだろうが、念のためその先まで触る。やはりスプーンだ、と左手に持つと、彼は右手であんみつの器を引き寄せた。

「いただきます」

「あつ……いただきます」

彼の声に反応して、詩花が何かを思い出したかのように声を上げたが、すぐに做うように食前の挨拶を口にする。

久遠はスプーンで器の中を探った。何処に何があるか、把握しようと思つての事だった。掻き混ぜるのではなく、盛り付けが崩れないように、慎重に。餅のような弾力は白玉、固めのゼリーのようなものは寒天か、抹茶ゼリーだろう。下部に敷かれた液体は抹茶みつ。形がすぐに崩れるが、掬うと重みを感じるそれはあんこで間違いない。せつかく掬ったのだからと、彼はそれを口の中に運んだ。続けざまに、白玉も口の中へ。

「んっ……」

上品な甘さ、小豆独特の優しく奥ゆかしい香りが鼻を抜ける。舌触りはお汁粉ほどではないが、口の中で少しづつ溶けていく、まるできめ細やかなアイスクリームのような。その上で、小豆の粒が細々と歯応えを主張する。それが弾力の強い冷たい白玉と合わせり、和のハーモニーを紡ぎ出す。ああこれだ、と久遠は満足そうに頷いた。

んん、と幸せそうに喉を鳴らすのが伝わってきた。対面から、おそらく詩花が舌鼓を打っているのだろう、と。久遠は微笑ましく思いながら、器の中を気ままに口に運んでいく。

そうして、どれくらいの間が経つただろうか。

あんみつを食べて、息を吐いて、煎茶を飲んで、息を吐いて。二人の間に会話は殆どなかったが、その一時を堪能していた。和やかで、穏やかで、幸せな時間を。

「クオンさん」



不意に、詩花が話しかけてくる。久遠は、どうしたの、とあんみつを食べ進める手を止めて、煎茶を一口含んだ。

「ステージの上に立つ前に、どうしても聞いておきたいことがあるんです」

改まって、真剣な声音が彼の耳を打つ。どうしたのだろうか、聞きづらいことなのか。何にしても、久遠は答えるつもりで腰を据えて、詩花の言葉を待った。

「不躱なのは、わかっています。それでも、聞いておきたくて。きっとこれは、クオンさんの音楽にも関わることだから」

一つ一つ、言葉というものが重みをもって伝わってくる。覚悟のように、強い決意を感じさせる声。その前置きの重さから、何を聞きたいのか。久遠は薄々、気が付きはじめていた。

「本選で、ベートーヴェンの『悲愴』を聞いた時から、疑問に感じていたんです。ウィーンに居た時から、クオンさんは幼馴染のことを、ずっと気にしている。日本で契約の更新を終わらせたら、真っ先に袖ちゃんのところに行つて」

先に帰国した私の所よりも先に行こうとしましたよね、と詩花の言葉を、久遠は特に否定するわけでもなく、黙して聴いていた。事実だからだ。ただし、詩花とはたまたま、961プロのオフィスの中で再会しているので、「一番」にはいかなかったが。

詩花は、袖がアイドルになったことを久遠が知っていることについては、疑問に思っていない。ウィーンにいる彼に電話をしたときに、765プロの誰に出会ったとか、どういう話をしたとか、話した覚えがあるからだ。

「クオンさんと袖ちゃん……お二人が幼馴染なのは、静香ちゃんから聞きました」

息を大きく吸って、吐き出す音が静かに響く。そして。

「クオンさん。袖ちゃんと、何があったのか。教えてもらえませんか？」

言外に、それほど執着する理由が分からない、と詩花は言っていた。それに対して、どう答えたものか、と久遠は頭を悩ませて、思わず喉

が震えた。

「……僕の音楽性と、紬ちゃんが。どうして、繋がると思ったの？」  
狡いとは思ったが、久遠は疑問を返した。それも、少し的外して返した。安易に触れてほしくない話題であること。何より、納得できるような理由があつたとしても、この件を話そうとは思えなかつたから。申し訳ないとは思いつつも、厳しい言葉を投げつけた。

「私は、クオンさんの音楽、とても凄いと思っています。あれだけ、人の心を動かせるなんて。それが、たとえ正と負のどちらに向いていても、変わりません」

音楽つてそういうものですから、と詩花は朗らかに言つてのける。音楽性を否定したいわけじゃない、という詩花なりの気遣いなのだろう。それがとても温かいと思うと同時に、肌をジリジリと焦がす光のように熱いとも感じた。

「私が目指しているのは、みんなが楽しめて、笑顔になれる。そんなキラキラに輝いたステージを披露できる、アイドルです」

ドクン、と久遠の心臓が飛び跳ねた。鼓動は徐々に早くなり、身体が寒くもないのに震えはじめた。言わんとしていることを理解した。最初はそれで誤魔化せるだろうと思つていたが、そんなことはなかつた。彼女は、核心を突いている。久遠の音楽を、真に理解している。バレてはいけなかつた。特に、紬を知る誰かにバレてしまつては絶対にいけなかつた。久遠の音楽は、綺麗なものではない。だから、その真意を知られてはならない。晒されるのだ。白日の下に。その罪を。

「まつ、て」

やめてくれ、と心が叫んでいた。それでも、喉から出てくるのは、震えたしやがれ声。身体は音を立てそうなほど震えていて、抑えようとしても止まらない。涙が出そうなほど、悲鳴を上げて狂つてしまいうなほど、追い詰められていた。

「やめて、くれ」

懇願した。必死に、もはや色もグチャグチャに混ざつて、何を言いたいのかさえ分からなくなつた声で。それでも何とかできないかと、

足搔いて見せる。

「これは、話せない。詩花さんでも、社長にも、話せない……。ダメだ、ダメなんだ」

説得するための言葉なんて、見つからなかった。これは、お互いのエゴのぶつかり合いなのだど理解していたから。そしてそもそも、理はずべて詩花の方にあった。きっと、この太陽のように眩しく、温かく、熱い少女は。ファンのみんなだけではない。伴奏の自分も含めて、笑顔になつてもらいたいと、思っている。だから、太陽なのだ。

だから、感情論という日傘を差すことでしか、逃れる術が見つからなかった。

「お願いだ。後生だから、これだけは、聞かないで。これは、僕の罪だ。紬ちゃんは、違う。悪くない。絶対に。むしろ、僕が紬ちゃんを傷つけて……。っ！」

慌てて口をつぐみ、歯を食いしばる。言い訳と懇願をわけも分からず並びたてるうちに、自白をしようとしていた。そんな単純なミスをした自分に、憎悪が滲む。胸の奥をズタズタに引き裂くような怨嗟が湧き上がる。他でもない、自分への刃となつて。負の感情がとぐろを巻いて、鏡合わせの自分を睨み付ける。

「これだから、僕は……。いつも頑張つて、それが空回りするから……。だから……。っ！」

紬ちゃんを傷つけることになった、と汚泥のようなドロドロの怨嗟を飲み込んだ。この黒い感情を向けるのは、自分だけで十分だと思つた。目の前の太陽を、こんな醜い感情で汚すわけにはいかない。これ以上は口を開くまいと、口を閉じて歯を食いしばるだけでなく、俯いて態度で示す。もう語ることはない、と。

「どうしても、話しては……。くれないんですね？」

詩花の言葉に、久遠は沈黙を貫いた。それが答えだとばかりに。あまりにも硬い決心。甲羅に籠った亀のような態度に、そうですか、と彼女は悲しそうに言葉をこぼした。藍の音色は、ぼろんと、寂しくこぼれ落ちる。

聞こえ過ぎてしまう耳に、胸に、痛みが走る。締め付けられるよう

に、絞られる様に、あるいは針を刺すように。それでも、口を割ることとは無かった。

「でも、これだけは。言わせてください」

先ほどとは打って変わって。詩花の声音は緋色の熱を持っていた。決意をするように、やってやる、という意気込みを感じさせるように。

「必ず、笑顔にします。演奏中の、クオンさんも」

その覚悟に返す言葉を、久遠は持ち合わせていなかった。沈黙を貫いて、ズボンの生地を力任せに掴む以外に、出来ることは無かった。

「……お仕事の話ばかりでごめんなさい。残り、食べきっちゃいましょう！」

努めて明るく、少女は声を紡ぎ出すと、スプーンを片手に宇治抹茶あんみつを食べ始めた。食器の微かな音から、久遠にもそれが伝わってくる。

食欲は失せていたが、それでも残すのは悪いと思い。そして気を遣わせてしまった手前、これ以上、少女を困らせるわけにもいかないと思ひ。改めて、スプーンを手に取り、白玉と抹茶のあんみつを掬って、口の中へと転がした。

「……苦い」

濃縮された宇治抹茶の苦味が、頭の奥まで痺れる様に響き渡った。

## 小さなキミのため

音楽は、一つの証明手段だった。

あの日の選択は、決して間違いじゃないのだと。それを誰の目から見ても明確なモノにしたくて。そんな動機から進んだ道なのだ。

キミがあの日に負い目を感じるのならば。

——僕はあの日に確かな意味を持たせて、正当化しよう。

キミがあの日自分を許せないのであれば。

——僕はあの日に助けたキミを、今生きているキミを全力で肯定しよう。

キミがあの日のこと誰から何を言われようと。

——僕はあの日に感謝していると主張を続け証明して、キミの無実と僕の罪を晒し出そう。

僕は退かない。例えそれがキミ相手であつたとしても、主張するための音色が尽きるまで止まりはしない。キミ自身にだって、キミを否定させはしない。そうじゃないと、僕は誰を助けたのか分からない。あの日のはボクは、へボク／キミを突き落としたことになる。

だから、紡ごう。間違いはなかったと、声高に叫びながら力強い赤色を。

奏でよう。今を生きている僕たちの、緋色のメロディを。

生み出そう。キミとの明日、黄色のマーチを。

「きつと、その先で幕は上がる筈だから」  
なのに、どうして。

僕の生み出すメロディは、藍色に沈んでいるのだろうか。どれだけ綺麗な未来を想像しても、生み出せるのはやっぱり、悲愴の独奏曲。音符はバラバラに散乱して、宙を舞い、あるいは地面に落ち、または地を這い、いつの間にか形も湾曲して纏まらない。

そうだとしても、止まるわけにはいかない。

これは、キミの未来を願ったマーチだ。あの日に縛られることなく、自由への解放を謳うための伴奏だ。

それを終えてようやく、始まるんだ。あの日、止まってしまった僕たちの物語が。

——でも、どうしてだろう？

キミの未来をどれだけ紡ぎ出そうと、メロディを繋げマーチにしようと頑張っても。僕には、キミの笑顔が見えない。たった独りのキミだけが、振り返って泣いている小さなキミだけが、僕の脳裏に貼り付いて離れない。

それが、どうしてなのか。

キミには、何が見えているんだろう？

僕には、キミが見えている筈なのに。

それなのに、キミの為の音楽は、生み出せない。

何が足りないのか。

キミには、わかってるのかな。

不意に、僕の中のキミが、小さく口を動かした。

みつけて、と。

瞳からほろりと雫が落ちて、音色の海に波紋した。



「……はぁ」

不意に、溜息がこぼれる。本日何度目か、片手の指で足りなくなつてからは数えるのもやめた。最初は、あの日の夢を見て飛び起きた後にひとつ。次は、決して得意とはいえないダンスレッスンの時にひとつ。その次は……同じ理由だったかもしれない。

白石紬は、まさに不調といって差し支えないほど、体の自由がきかなかった。昨日は出来ていたステップがこの日は何度も失敗して。

失敗に今度こそはと意気込んで挑戦すれば、力み過ぎてその次のス  
テップがワンテンポ遅れた。修正すれば新たなミスが生まれて、それ  
を修正してまたミスが……の繰り返し。体力が削られていくばかり  
だ。

そうして息も絶え絶えとなった頃、ついにはプロデューサーから  
「今日はお終いだ」とストップが掛かった。まだやれます、と食い下  
がったが、オーバーワークだ、と言われてしまえば、紬も引き下がる  
ほかに無かった。事実、足が棒にでもなったかのように、いうことを  
きかない。これ以上は無理だと、身体が悲鳴を上げていた。これ以上  
は逆効果だと、自分自身が一番よくわかっていた。

夢のせいだ、と素直に認めたくはなかった。しかし、耳に残った誰  
かの声が煽るように「あの日のことは全てお前のせいだ」と心の内を  
蝕んだ。まるで、霧が少しずつ足元に掛かるかのように。つま先から  
そっと、全身を包み込むように。悪意の言葉は、病魔のように身体を  
侵蝕していくのだ。

「紬ちゃん、ちよつといいかしら?」

鉛のように重たい体を、控室の椅子に預けて休んでいた時。不意に  
目の前から声が掛かった。誰も居ないと思っていたので、驚いて顔を  
上げてみれば、そこには小さな子ども……に見える、緩い三つ編みが  
特徴的な大人のお姉さん(年齢だけは)こと馬場このみが立っていた。  
こちらを窺うような視線に、何か御用でしょうか、と紬は反射的に言  
葉を返すと。

「悩み事があるんでしよう?」

単刀直入に、鋭く的確に本題に入り込んで来た。突然のことに目を  
白黒とさせ、思わず、どうして、と訊き返してしまう。

「いや、どうしてって。今日の紬ちゃん見てれば、誰だってわかるわ  
よ」

「……それは、私の今日のレッスンの出来が、あまりに不甲斐ないもの  
だったから、と?」

心当たりはいくらでもあった。分かっているのに、いつもの厳しく  
早とちりな見解は口から飛び出ていく。自分の何がいけなかったの

か、他の人からもその理由を訊かなければ、不安で仕方がなかったから。分かり切っているとしても、訊いてしまう。

「外れよ」

「——えっ?」

思わず間の抜けた声が口から漏れ出た。まるで地に足が付かないように。模範解答を覆されたかのように。鉛の様に重かったが体が、宙に浮いたような感覚を覚えた。

「表情よ、表情。細ちゃんだったら、思い詰めたような顔をしていたんだから。こう、暗くどんより、何かに追われて怖がっているような、そんな顔」

「……」

今度は声すら出なかった。ただただ、このみの洞察力に驚かされた。いや、自分がそのような表情をしていたことに呆れた、というべきか。自分の顔を触ってみるが、それだけでわかる筈もなかった。

「ぶにぶにのお肌を触って表情変えるよりも! ほら、お姉さんに悩み事を話してみなさい。こう見えて、765プロアイドルの年長者なんだから! それに、誰かに話して、気持ちがスッキリすることってあるのよ?」

だから話してみなさい、とこのみは紬の対面の席を陣取った。視線は真つ直ぐと紬の目に向けられており、その姿勢から「話すまでここに居る」といった無言の気迫を感じた。当然、それは紬の勘違いなのだ。

「話して、よいものなのでしょうか……」

自問するように、紬はポツリと呟いた。彼が関わっていない第三者だから話せると考えるべきか。それとも、関係の無い第三者だから話せない、と考えるべきなのか。幼馴染の話といえども、今悩んでいることはあまりに、重すぎる。何より、誰かに話すには多大なる勇気が必要だった。清水の舞台から飛び降りる、それほどの覚悟が。信頼できる仲間だからこそ、話して良いと思っている自分と。何があっても話したくない臆病な自分が、心の中でせめぎ合う。

「悩んで、解決できるなら、話さなくてもいいけど。……ひとりで解決



できないことなら、遠慮なく、ね。抱え込みすぎると、後に引けなくなつて、話すタイミングもなくなつちやうから」

人生の先達としてのアドバイスよ、とこのみは茶目つ気たつぷりにウイנקをしながら言い切つた。本人の性質か、あるいはこちらを氣遣つてのことか、その両方なのか。強引には聞かずに、そつと歩み寄るように話をするこのみの姿勢に、紬の強張つた心は少しずつ解れるように弛緩していく。

このまま抱えて、何もできないよりは、誰かの力を借りても解決するべきか。しかし、そうして解決をしたところで、納得できるのだろうか。償いとして、成立するのだろうか。光を失つても、尚も凜と咲き誇る彼に向けて、胸を張つて結果を報告できるのだろうか。

片や、ウイーンで大成功を収めた天才ピアニスト。

片や、最近成果が上がり始めた新人アイドル。

差は歴然としていた。そもそも、土台が違うから当然ではある。六年と、一年未満の差は大きい。それでも、今の自分は彼に負けることはできない、という強い思いが胸にあつた。天才ピアニストから光の音色を奪つたのは、自分だから。それを払拭できるだけの価値を証明しなければ、あの日の感謝を証明することはできない。白石紬は助けられた者として、その責任を全うすべく恩人を越えなければならぬ。そんな傲慢な考えが、彼女の意識には強く根付いていた。

だからこそ、必要なのだ。どんな不具合も、どんなスランプも、どんな悪条件も、自身の足で乗り越えるだけの力が。仲間を頼り、楽な道へと逸れるのでは、彼に追いつくことはできない。弛緩していた心を引き締め、流されかけていた自分を心中で叱咤する。そうした後、紬はこのみに向けて首を横に振つた。

「これは、私の問題です。私、個人の。なので、このみさんのお力添えを頂くわけにはまいりません」

意地、なのだろう。見栄つ張りなのだろう。それでも、これは自分で越えるべき壁なのだ、と、紬は決意を固めた。誰に憚ることもなく、自分の責任を完遂するために。

「……そう。でも、辛くなつたらいつでも相談してね?」

そう言いながら、このみは席を立ちあがる。これから莉緒ちゃんたちと約束があるからまたね、と一言据え置くと控室から出て行った。その時の心配そうな表情を見て、胸がキュツと締め付けられるように感じたが、決意に揺らぎはなかった。

「頑張らんと」

とはいっても、今日は足が棒になってしまっているので、ダンスレッスンは出来ない。オーバーワークを気にする程度の理性は残っている。

だから帰宅しよう、と紬は席から立ち上がると控室を後にした。

明日はもつと、という情熱を胸に。

劇場を出て入り口に立ったとき。

不意に、耳の奥から楽しそうに弾かれた三味線の音が木霊する。

突然のことに驚き振り返ってみるが、そこには劇場の玄関が広がっているだけだ。その事実には、思わず俯いて、泣きそうな声がほろりとこぼれた。

「もう一度、聴きたい」

それでも。無邪気で、真っ白で、跳ねるように弾かれる音の繋がり。自分が知っている限り、最高の音色を目指して。

彼女は顔を上げて、その歩みを進めるのであった。

## 偽りの音色

——詩花の公演、本番まで残り一週間。

久遠は今日も鍵盤を触っていた。音を弾き出し、紡いで、コロコロと転がして。遊ばせていた音符は、しかし地を這うように重かった。高い音なのに、足元で不快な音を奏でているように聞こえる。まるで、地獄で音符が悲鳴を上げているように。悲痛に声を歪ませるように。

最悪だ、と久遠は思わず頭を抱えて俯いた後、天を仰いだ。意識しなければ、このドロドロに溶かされたような地獄の音色が漏れ出るのである。それを耳に入れた感覚と来たら、耳の奥にジェル状の何かを垂れ流したような不快さだ。思わず、弾いている自分自身で耳を押さえたいくなる気持ち悪さには、もはや溜息も出なかった。

「これ、ちよつとまづいな……」

クラシックなら、この音色に合う曲を見繕うことで、その日の不調をカバーすることも出来たが。今回必要なのは、アイドルのステージのための伴奏である。それは間違いない、星のように光り輝いていて、明日への希望を湧き起こさせるほどキラキラしていて、追い風のように背中をそつと押してくれる優しさに溢れて……そして、歌と主体のアイドルの個性を最大限に尊重した後光のようなメロディでなければならぬ。

だが、急に誰かのために弾けと言われても。

——大切な幼馴染へのメロディも紡ぎだせないのに、他の誰かだけの為になんて。

あの日の彼女を肯定するための曲すら紡げない両手では、愛と希望の輝かしいメロディなど弾けるはずもなかった。

何が足りないのか。何がダメなのか。これだけ気持ちを込めようとしているのに、どうして音色は沈みこんでしまうのだろうか。底なし沼に零れ落ちてしまったかのように、音符はまったく跳ねる様子がない。

軽快に弾こうと鍵盤の上で手を跳ねさせた……泥沼に沈み込むよ  
うだ、違う。

テンポを速くメロディに爽快感を持たせる……全力疾走した音符  
が先走る、違う。

昔の楽しい思い出に浸りながら音を弾き出す……指は活き活きと  
鍵盤の上を滑り、音が少しずつ上調子に跳ねだした、その直後だった。  
頭の中に、フラッシュバックした。

目の前に迫る影。大きな振動と共に迫るのは、見上げるほどの鉄の  
巨体。あつけなく、跳ね飛ばされる自分の身体。宙に浮いた時の感覚  
は、自分が鳥にでもなったのかと、錯覚するほどの解放感だった。何  
の寄る辺もなく、縛るものもなく、ただ自由に宙に舞って。

「——っ！」

思わず、無い筈の両目を押さえる。肉を抉るような鈍い痛みが、頭  
の中をけたたましくノックした。不快でどうしようもない不協和音  
は、四方八方から鳴り響く。雑音や騒音なんてものではない。これは  
もはや、音による暴力だった。凶器だ。身体の中身をめちやくちやに  
かき回したかのような感覚に、吐き気すら覚えた。ぐわん、ぐわんと  
意識が歪み始めて曖昧なものになってきた。

意識が闇に染まりかけたところで、歯を食いしばって必死に繋ぎ止  
める。鍵盤を乱雑に押さえ、足元から崩落するような落ちる音色を叩  
き出した。肩に鉛の様に押し掛かる音符は、しかしどこかに飛びそう  
な意識を繋ぎ止める重りとしては、十分だった。

「はあ……はあ……」

呼吸が荒くなってしまう。フラッシュバックが終わったとはいえ  
ども、頭の中から衝撃の余韻が引いたわけではない。後を引く頭痛  
に、混濁した意識。ピンと張られた緊張の糸は今にも音を立てて千切  
れそうだ。ふと気を緩めてしまえば、全てが手元から飛んで行ってし  
まいそうな不安が、胸の奥でとぐろを巻いていた。

「——伴奏、か」

なんて残酷な仕事なのだろうか。倦怠感の拭えない体を椅子から  
床に投げ出した。頬を床に当てると、思いの外ひんやりと気持ちの良

い冷たさが伝わってきた。熱に浮かされた自分を慰めるような、撫でるような冷たさに、張り詰めていた意識の一切合切が少しずつ緩んでいく。

思えば、久遠という若きピアニストは、たった一人の誰かの為にピアノを弾いたことがなかった。それを弾こうと試行錯誤をすれば、必ずこの状況に行きついた。

勇気も、幸せも、輝きも、楽しいも、肯定も、賛美も、好きも、大好きも、愛しているも、大丈夫も、ありがとう、も。与えられないし伝えられない。

それなのに。恐怖、不幸、絶望、つまらない、否定、蔑み、嫌い、大嫌い、無関心、不安、罵詈雑言、は。いくらでも紡ぎ出てきては、否応なく相手に伝えて来た。

久遠はそんな自分が大嫌いで。誰かのために音を紡ごうとしたときに、試行錯誤したときに。いつも、自分は何のために音楽をやっているのだろう、と自問自答する。答えは、決まって「証明」だと言っているが。……紡ぎ出した音色は確かに証明していた。あの日を正しかつたと証明することが、不可能だと。証明していた。

だが、今更引き下がるわけにはいかなかった。周囲の反対の全てを押し切って、ウィーンへ音楽を勉強するために渡って。まだ地元に住む時に、たまたま出会ったパトロンに、今更はずっと面倒を見てきてもらって。確かな結果を叩き出して。意地や恩義だけではない。自分が最も得意とするステージさえも投げ出してしまえば、それは今までの全てを否定することになる。それだけは、久遠にとって何があっても許せるものではなかった。

——今の自分があるのは、あの日のことがあったおかげだから。あの日があったから、立派になれたんだ、と。

胸を張って、祝福のメロディを奏でたい。聴かせたい。その渴望は荒れ狂う暴風のように激しいのに。音色は、まるで気持ちいを伴わない。空っぽどころか、むしろ祝福とは真逆の呪いとなって音符が身体中にまとわりつく。汚く、醜い、泥のような音が。びちゃびちゃ、べちやべちやと。

(わからない)

久遠は紬のことを、疎ましく思ったことは無い。あの日があったからといえども、責めようなどとは露ほども思わない。真に責めるのは、自分自身。手を差し伸べた自分が、結局彼女を暗い谷底に突き落としてしまった。そんな愚かしい自分への憎悪が尽きない。

だから、久遠の音楽とは、ある一言で言い表すことが出来た。

(君に、何色の音を届けたいのか。わからないんだ……！)

——贖罪。

あの日の罪と傷を、それ以上の成果とその報告によって注いで。ぽっかりと空いてしまった穴を塞ごうとする、そんな想いが、彼をピアノへと向き合わせていた。

たった、一人のためだけに紡がれる音楽というものは。

どうしようもなく悲しくて、訳も分からず切なくて。キミの為だけにと頑なになればなるほど、その先を見つめている自分が震えてしまう。歯をみつともなく鳴らして、背筋に氷でも入れたように冷たい怖気が奔り。そんな臆病な自分のせいで、輝かしかった音色は途端に闇に溶けていく。

不安に駆られて、見えもしないのに横を向いて誰かが居ないかと確認してしまう。手の開閉を繰り返し、手を引いてくれる誰かを確認する。……当然ながら、誰も居ない。

まるで取り残されてしまったようだ、力なく天を仰いだ。自覚するほど、身体の震えが止まらない。こんな状態ではまともな音色は紡げない。落ち着くまで、横になっていようと全身から力を抜いて寝そべった。

(『4分33秒』でも演奏しようかな……)

とはいっても、ジョン・ケージの『4分33秒』とは、第一から第三楽章まで、全て休止することしか指示されていない、無音の音楽である。そのため、演奏者は誰も楽器を弾いてはならない。

では、『4分33秒』では何を聴けばいいのか。それは、演奏者や観客の呼吸や生命活動の音であったり、不意に出て来たくしゃみの音であったり。その時間内にあるすべての音が、等しく『4分33秒』の

演奏とされる。だから、一つとして同じ音楽には成り得ない……という見解のひとつ。

久遠は演奏者でありながら、耳を澄ませることだけに集中した。

元が防音室なため、外から音が流れ込んでくることは無い。風いだ海のような静寂の中。しかし、ふとした拍子に、胸を叩く鼓動が聞こえて来た。トクントクン、と生命の音が早鐘を打っている。それを十秒ほど味わっていると、今度は空気の擦れる音が耳に届く。開閉可能な窓などついていないから、外から流れたものではない。自分の鼻から、規則正しく間延びした音が奏でられている。無機質で、無感動で、意識しても特別感じ入ることのない音は。しかしどうしてか、頭の中に浸透するように、荒れた心を風いでいく。

何も考えず、ただひたすら聴くことに徹した。そうするだけで、不思議と思考はクリアになっていき、鼓動は嘘のように暢気なものに戻っていく。

そうして、第一楽章が終わった。次は第二楽章に移る。……とはいつても、ただ意識を切り替えたように見せかけて、再び耳を澄ませることに注力するだけなのだが。

それでも、第一楽章と第二楽章は違った。第一楽章では初め、早鐘を打っていた鼓動はすっかりマイペースに働いている。呼吸のための鼻の音も、第一楽章より間延びしていた。

(これはこれで……仕切り直すには、打ってつけかな)

鼓動と呼吸。二つの音を聴いていると、身体を預けていた床が少しずつ沈み込むような、不可思議な感覚を徐々に覚え始める。まるで安眠に誘われるように、ふかふかのベッドに身を委ねるように。闇の中に安らかに溶けていくような感覚は、ウィーンにしている音楽の師との対話を思い出させる。

『いいかい、クオン。君は明るい音とか、希望とか、幸せとか、そんな音色が極端に出せていない。それは自覚があるんだね?』

『はい。どうしても、楽しそうに弾いても、音符が跳ねなくて……』

『正直な話、君の才能から考えれば、それすら自由自在に操れても不思議じゃないのに、弾けない。きつと、過去に何かあったのだろう。君

の負の音がそれを証明している。今すぐケリをつけて欲しいところだけど……難しいのだろうか?』

『……ごめんなさい』

『言っているも仕方ない。ならば、簡単だ。方向性を変えればいいんだよ。あまりいい手ではないけど、解釈をずらして音を誤認させるんだ。次の小さなコンテストで弾く「平均律クラヴィーア」を、冒瀆的かもしれないけど、この方法で試しに弾いてみよう。審査員の評価を、試してみよう』

『えつと、具体的には?』

『あまり、人前では言わないでほしい。というより、これは君にとって辛い選択かもしれない。それでも、君が人を幸福にする音楽を奏するには、この解釈が一番適している。……まあ、つまり——』

——安楽死、さ。

久遠は師のことを、残酷だとは思わない。むしろ、先生としてはあまりに優秀であったと考えている。踏み込むのではなく、一歩下がった場所から教え子に対してその音色を出させる工夫をするとき、彼の師はあまりに巧かった。偽りの音色だとしても、彼の音楽は確かに大衆の心を掴んで見せた。この成功はひとえに、師のおかげであったと、久遠は感謝を絶やしたことは無い。

(解釈をずらすことによる、音の誤認……いけるかもしれない)

安楽死のイメージも、確かこうして寝転がっている時に固まった。全て委ねてもいいという底なしの優しさに、沈んでいく。そのまま、意識を優しさの闇の中に沈めて……そこから先は、何も無い。ただ、気持ちの良い音符に包まれて、安らかに光の粒となって消えていく。ならば、詩花のための解釈とは、一体どうすれば良いのだろうか。安楽死は違うだろう。あれは全てを委ねてもいい、という優しさと甘さの中で、心を風ぐための音色だ。

詩花はみんなが楽しめて笑顔になれるステージにしたい、と言っていた。つまり、笑顔になれるのであれば、そこに涙が伴っても構わない。その先が絶望だとしても、紡がなければ問題ない。

ならば、解釈をずらすそうではないか。そう聞こえるように、偽りの



希望を輝かせよう。それを後押しに、詩花を舞台の上で最高の太陽に仕立て上げるのだ。イメージするのは……そう。

——蜘蛛の糸を登っている最中。

まだ、下を見ていない。まだ、途切れることを知らない。希望だけの無垢の状態を、音符に乗せようではないか。その先さえ弾かなければ、これはまさしく、希望と光の音色になるだろう。

気が付けば、『4分33秒』は第三楽章まで終わっていた。もう、あるべき無音は存在しない。音に起こすことこそが、今やるべきことなのだから。

「」

立ち上がってすぐに椅子に座って、呼吸を一度整える。意識を切り替えて、連想するのは希望を見出した人間の姿。天へと登るための蜘蛛の糸を見つけて、その光に泣きながら飛びついて、幸せそうに登る姿。

イメージしながら、彼は詩花に向けた音色を奏で始める。どこまでも希望に染めて、向こう見ずな、偽りの光の音色を。嬉しそうに、楽しそうに、泣きながら笑うように、音符を跳ねて弾ませ綻ばせ。天から降り注ぐ星のファンファーレを紡ぎ出す。

下を見ない。未来を見通さない。停滞したまま、ただ繰り返し幸せを描き出す。

その先に例え、絶望と悲しみに染まっていたとしても、今が幸せなのだから。

ならば問題はない。

——その先を知っているのは、僕だけだから。

さあ希望を登れ。その輝きを全霊に浴びろ。その向こう見ずな幸せと平穏を存分に享受するといひ。奏者が居る限り、絶望は全て引き受けた。

だから、前だけを向いて進めと、追い風のように音符の波で後押しをする。

『そこで貴様の出番だ。精々、詩花を引き立てる、その礎となることに全力を注ぐがいい』

これで、いいのだ。これこそが、今のベストなのだと、自分に言い聞かせ続ける。

『必ず、笑顔にします。演奏中の、クオンさんも』

透明な言葉の刃が胸を抉る。思い出した詩花の言葉を、しかし必死で振り切つて。演奏を中断させることなく、弾き切つた。

「……………」

手には、何とも言えない気持ち悪さが残つた。これで終わりじゃない、と魂が叫んでいる。まだ弾かなければ完成しないと、手が震えて訴えてくる。この第一楽章だけで終えてはならないと、第二楽章へと進めそうになってしまう。それを必死に抑え込み、ピアノの蓋を半ば叩きつけるように閉じた。絶望の音色が、閉じ込められるように蓋の中で鳴り響いた……気がした。

「紬ちゃんには、あまり聞かせたくないなあ……………」

今まで、自分の事を知らない審査員のことは、いくらでも騙してきた。だが、後藤久遠という人間を深く知っている相手だけは、騙せないかもしれない。

——ああ、音楽ってなんて難しいんだろう。

似た音は出せるのに、それが偽りだなんて。

だからこそ、願わずにはいられない。

(どうか、誰も第二楽章には気づきませんように……………)

弾くのは、第一楽章だけなのだから。その先まで知らなくてもいい。

これは、演奏者だけが胸に秘めた秘密。ピアノの奥底に封じ込められた深淵なのだから。

だからどうか、覗いてくれるなよ、と。

彼はピアノをひとつ撫でた後、防音室を後にするのであった。

## 招待状

——詩花の演奏、本番の四日前。

リハーサルを除けば、最後の合同練習になる場で。久遠は詩花の代名詞ともいえる曲を弾き切ってみせた。淀みなく、滑らかに、何かを含んでいるなどと想像出来ないほど綺麗な音色は、天に昇るように、空から降り注ぐように鳴り響いていた。それに背中を押される形で、詩花もまたいつも以上に大らかに、伸び伸びとその歌声を出し切った。

「……………どうだった？」

曲を一通り合わせ終わった後。久遠は詩花の様子を窺うように訊いた。椅子に座っている彼は、既に鍵盤から手を降ろして、握り合わせるように一つの拳を作って膝の上に置いていた。主役からの評価を待っている。

「とつても、ステキでした！ 背中を押して勇気を貰えるような、キラキラとした音符が空から落ちてくるような……………風が舞い上がるような、ステキな伴奏でした！」

元氣いっぱいいな明るい声が、久遠の耳に返ってきた。その評価に笑みを浮かべながら、彼は「ありがとう」と返して、肩の力を抜いて脱力した。

「どうやら、私の指示通りに出来ている様だな」

久遠が気を抜いた瞬間だった。尊大で部屋によく木霊する声が耳を打つ。いつの間に居たのか。少なくとも、演奏を開始するまでは部屋に居なかった人物……………黒井社長に、久遠は慌てて、無意識に声のした方に会釈をした。

「あつ、社長。いつから聴いていたんですか？」

「演奏が始まってすぐだ。……………それで、久遠」

話の矛先を向けられて、思わず身体が跳ねる。聴かれているとは思わなかったことと。この人には絶対にバレる、という確信が、彼の中にあつた。だからこそ、後ろめたさから、意識せずとも体が縮こまつ

てしまう。

「ウィーンでの報告は聞いている。まったくもって、腹立たしい」

吐き捨てるように言う黒井社長の言葉に、久遠の手に更に力が込められる。爪が手に食い込むほど。

「社長。クオンさんは、ウィーンで大活躍していたと思いますけど。それに、今の演奏だって、とつてもステキでした！」

すかさず、といった様子で詩花は久遠に助け舟を出すのが、黒井社長は「そうではない」と首を横に振った。

「私が何年、貴様のパトロンをしてきたと思っっている？ まったく、クセも直せない無様を晒して。だから私が指示を出すことになるのだ」

——ああ、この人にはかなわない。

久遠は不意に、そんなことを思ってしまった。始まる前から、全てを見抜かれていたのだ。年単位で会っていなかった相手であっても、自分の全てを見透かされていた。

伴奏を任せられたときから、黒井社長は何もかも全てを織り込み済みだったのだと確信する。「そこで貴様の出番だ。精々、詩花を引き立てる、その礎となることに全力を注ぐがいい」とはつまり、自分を押し殺してでも音を出せ、という指示だったのだ。暗喩して「クセ」などと指摘したのは、詩花が気にしないようにするための気遣いだろう。

「……どちらに転んでも、よかったと」

「ふん。玲音のところを送るのは延期だ」

「——っ！」

玲音。それは961プロに所属する、正真正銘の世界規模のトップアイドル。前代未聞のオーバーランクに位置付けられた者の名前である。引き合いに出された名前が名前だけに、久遠は息を詰まらせた。

「本番は予定通り行う」

言い残すと、黒井社長はツカツカと高そうな革靴を鳴らして遠ざかって行った。詩花は「どこが悪かったんだろう？」と不思議そうに呟くが、それを黒井社長にぶつけることは無かった。

「……社長は、僕が十二歳の時から、パトロンとして困ってくれていたから。あれはあれで、信頼してくれているんだよ」

適度にフオローを入れて、久遠は鍵盤に手を置いた。ぽろん、と穏やかで柔らかい音色を転がして。続きはどうする、と詩花に問う。

「あつ、そうですね。時間いっぱい、やっちゃいましょう！」  
「わかった」

イメージを崩さないように、焼き物の焼き入れ作業に入るように、久遠は詩花に合わせて何度も音符を弾き出した。この音色を忘れないために、綻びを生まないために、本番で壊れないように。何度となく、第一楽章を弾いて。隠された第二楽章を飲み下す。

——これ以上、誰も悟ってくれるなよ、と。

誰にも見つからないように、彼は紡ぎ出す。美しくみえる世界を。美しく聴こえる音色を。清らかに思えるメロディを。

弾くたびに手が腐敗するような気持ち悪さを感じたが、そんなものはお構いなく。

彼はずつと、綺麗に聴こえる音色を弾き続けるのであった。



765プロライブ劇場。太陽がまだ天辺にある頃に、詩花は軽い足取りで中に入っていく。そうして目指したのは控室だ。前日にアポイントメントは取っているの、入れ違いになることもないだろう。

控室の前に着いたところで、小さなバツクを肩に掛け直す。そして深呼吸を一度行くと、こんこん、と控えめにノックをした。すぐさま「はい」と落ち着いた声音が返って来ると、ほどなくして扉が開いた。

中から出てきたのは、人形のように端正な顔立ちに、青みがかった上質な銀糸のような腰まである髪を先っぽで結わえている少女。前

髪を雅な水引細工で留めているのが特徴的な彼女は、詩花の姿を認めると微笑みながら一礼をした。

「こんにちは、詩花さん」

「グリユース・ゴット。紬ちゃん、久しぶり……かな？」

「十日ほど、お会いしていませんでしたね。……お話は中で。おあがりあそばせ」

そうして、彼女……白石紬に誘導されるままに、詩花は控室に入つて机の前に移動する。その机の上には、山吹色のプラスチックパックに入った和菓子が二つ、急須がひとつ、湯呑が二つ、茶葉の入った袋がひとつ、匙とそれを置いたための小皿がひとつずつ、電気ケトルがひとつ用意されていた。

「わあ……おいしそうなお菓子ですね」

「はい。近くの老舗和菓子店のものを、たまたま買うことができましたので。すぐにお茶を淹れますね」

言いながら、紬は電気ケトルを片手に、まずは二つの湯呑にお湯を注ぎ始める。ほどよいところまで入れたところで電気ケトルを置くのと、今度は急須の蓋を取った。ついでに、その上についていた取っ手のついた茶漉しは匙と交代するように小皿の上に。匙を片手に茶葉の袋を開けると、急須の中へ茶葉を適量、匙と茶葉の袋をさつさと片付ける。そろそろいいだろう、と紬は湯呑に入れて置いたお湯を急須の中へ入れる。

一連の動作を、詩花は物珍しそうにその光景に見惚れてしまう。手順が多く、ややこしく見えるお茶の淹れ方を、舞を踊るように滑らかに行うものだから。思わずほっと息が漏れ出る。

しばらくすると、紬は小皿の上に置いていた茶漉しを手にとって湯呑の上にかざした。もう片方の手には急須を持ち、音が立たないほど静かに煎茶を注ぐ。しかし、ほんの少し注ぐとすぐに急須を元に戻し、もう一つの湯呑に茶漉しを移動させて、そこに煎茶を注ぐ。それを数回、交互に注ぐようにして繰り返した。これは煎茶の濃さを均一にするための淹れ方である。

「粗茶ですが、どうぞ。和菓子とご一緒に、おあがりあそばせ」

そうして出来上がった煎茶は、淡く透き通った黄緑色を誇り、その匂いは喉奥に優しく染み渡るように奥ゆかしい。

勧められるままに、詩花は肩に掛けていたバックを隣の席に置くと、促された場所に着席して、手を合わせる。

「それでは、いただきます」

目の前に出された煎茶に口をつけると、程良い渋みが口の中に広がり、香りは鼻から抜けるように広がっていく。思わず和菓子が欲しくなり、プラスチックの蓋を静かに開けて、いつの間にか置かれていた和菓子用の楊枝を手に、一口サイズに切り分けて口に運ぶ。仄かに広がる生地の香りに、上品なこしあんが渋みの広がった口の中で溶けていく。それはさながら、オーケストラのハーモニーのように一つとなつて、口の中に温かい幸せを生み出した。

「とてもおいしいです！」

「……そう言っていたら、用意した甲斐がありました」

そんな詩花の反応に、紬はほっと胸をなでおろす。どうやら上手くおもてなしできたようだ。そうして、紬もまた和菓子の蓋を外して、煎茶と和菓子を口にした。

すると、今まで端正に、引き締められていたキリツとした顔が。ふにやり、と柔らかく綻んだ。紬は頬に手を当て、和菓子の味に思わず夢中になつて舌鼓を打つ。マンガであれば頭上に小さなハートマークが煙のように出ていたであろう様子。これはまた買おう、と頭の中のお気に入りリストにメモすることも忘れない。

「そうだ。紬ちゃん、今日はこれを渡そうと思って来たんです」

ふと思いついたように、詩花は楊枝を置いた。すぐに隣に置いていたバックを手にすると、中から小さな封筒を取り出して、紬に手渡した。

「これは……?」

「今度の私のライブのチケットです。伴奏にはクオンさんが出演するので、是非、観に来ていただきたいと思って！ 三日後で突然ですけど、大丈夫ですか……?」

「三日後……レッスンが入っているので、プロデューサーに相談して

みないことには、なんとも」

「それでも大丈夫です。三枚入っているのです、皆さんにも、もしよろしければ」

「それでしたら、ご厚意の方、受け取らせていただきます」

紬はチケットの入った封筒をしつかりと握りしめると、膝の上にとつと置いて、視線を落とす。封筒をジツと見つめて、行けるのなら行きたい、誰と一緒に連れて行けばいいだろうか、どんな伴奏をしてくれるのだろうか、などと思考の波が止まらない。

「……久遠くんは、どんな様子でしたか？」

紬は心配だった。彼が異邦の地に行ったことで、変わってしまったのではないかと。根底から彼が覆されてしまったのではないかと。久遠のピアノを聴くたびに、不安は黒い嵐となつて胸中で吹き荒れた。気が気ではなかった。

「……少し、思い悩んでいた様子でしたが。でも、昨日には素晴らしい演奏をしてくださったので。きつと、もう大丈夫だと思います」

そうですか、と紬は詩花の言葉を聞いて安堵の息を吐く。きつと、懐かしき故郷に戻ったことで、いつもの彼に戻ったのだろう。詩花の言葉を盲信するように、紬は自分の中から不安を追い払う。

「三日後。必ず、聴きに行きます」

「そう言ってもらえると嬉しいです。私も、きつとクオンさんも」

それから、小さなお茶会は他愛のない話と共にお開きとなった。紬は詩花が帰った後、すぐさまプロデューサーにチケットの相談すると、快い返事が貰えた。余ったチケットは、最上静香と桜守歌織の両名が本人たちの強い希望により参加することになる。

白石紬は、大事そうにチケットを握りしめる。もう一度、在りし日の音色を聴きたいと。

それが、パンドラの箱の鍵だとも知らずに。

彼女たちは、ライブ当日を迎えるのであった――。